〈研究論文〉

# 成人看護学実習における慢性期にある人々の看護に関する学生の学び

## ―透析センター実習記録の分析から―

岡部春香[*1]・庄村雅子[*1]・岩本敏志[*1]・大山太[*1]

## The learning experiences of nurse students on nursing for the adults with chronic illness at the clinical training : An analysis for students reports of clinical training at the hemodialysis center

Haruka OKABE [*1], Masako SHOMURA [*1], Satoshi IWAMOTO [*1] and Futoshi OYAMA [*1]

〈抄録〉

本研究の目的は、慢性期にある人々の看護を学ぶことを主眼とした成人看護学実習の中で行っている透析センター実習における看護学生の学びを明らかにし、臨地実習での慢性期看護に関する教育のあり方の示唆を得ることである。大学３年次後期－４年次前期で、同意の得られた70名の実習レポートを対象とし、Krippendorff の手法を参考に質的帰納的に分析した。結果、透析センター実習における看護学生の学びは、【透析の現場に感性を触発される】、【透析患者と家族にとって最良の支援を築く多職種支援の重要性】など８カテゴリーが明らかとなった。透析センター実習を通して学生は、感性が揺さぶられ、透析患者像、セルフケア支援、支援体制・システムへの深い理解に到達していた。急性期化する入院環境で、学生が慢性期看護に直に触れ学びを深める機会として、透析センター実習の有用性が示唆された。

Key words：成人看護学、臨地実習、慢性期看護、透析、看護学生

## Ⅰ．はじめに

医学の進歩と疾病構造の変化、高齢化により医療は高度化、多様化している。近年、病院は機能分化が進み、大学病院など急性期病床では急速に在院期間が短縮している。

看護基礎教育における臨地実習において成人看護学実習は、治療を受ける患者の看護実践を身につける、最も長期間の重要な位置を占める。一般に成人看護学実習では、学生が１名以上の入院患者を受け持ち、計画・立案した看護を提供していく方法で進めており、周手術期や慢性疾患の急性増悪における看護援助は多くの学生が経験できる。また、学生は、短期間に多職種が連携して患者と家族にかかわり、ケアの質を落とさずに安全・安楽な療養を支援する医療体制の必要性を学ぶことができる。

一方で、大学病院においては学生が受け持つ患者によって、慢性期にある人々と時間をかけてかかわり、セルフマネジメントを育む患者教育など既習の知識を、現場における体験から学ぶことが難しくなってきた。慢性期にある人々への看護を、臨地実習のなかで学ぶには、患者が向き合い対応している課題に触れて、患者が抱えている課題に対して、看護の立場からどのようなアプローチができるかについて、実体験することが重要である。慢性期にある人々への看護を臨地実習の中で学ぶには、患者の療養体験や、患者に対する看護師の実際の援助場面を見聞きすることから始まると考える。

本学では成人看護学実習Ⅱ（慢性期）において慢性期にある人々を対象に自己管理や患者教育が必要な患者への看護について学ぶことを目的として３週間行っている。

＊１　東海大学健康科学部看護学科（Department of Nursing, School of Health Sciences, Tokai University）

さらに、2008年度から成人看護学実習に透析センターの看護師および臨床工学技士からの透析療法と患者へのケアの実際および透析患者の看護に関する臨床講義と半日程度の時間での実地見学を導入し、患者・家族を取り巻く課題と、支援における看護の役割および専門性を教授している。透析センターに着眼した理由は、生活習慣病などに起因した透析患者の漸増傾向、および透析導入から維持に向けて地域を含めた幅広い場での多職種連携の実践を学ぶことに適していると考えたためである。学生は透析センターでの学びを通して、講義で学んできた慢性期疾患の患者の特徴、セルフマネジメント、透析療法患者への看護等と合わせて考えを深めることができる。教員は実習における慢性期看護に関する教育のあり方を学生の反応から結びつけて考えていくことができる。

慢性期の患者への実習と透析センターとの関連について調査している先行研究によると、透析センターで実習を行っていることについて幾つか報告している。佐名木らの研究（2007）では外来継続看護の一環として外来に焦点を当てて行っている。また、本研究と同様に透析センターで実習を行っている学生を対象とした研究（宮堀、2007）はあるが、患者の語りから慢性疾患を持つ人に対してどういう看護を行うべきかという視点に焦点が当たっている。本研究で対象となる実習は患者の療養体験だけではなく、患者に対する看護師の実際の援助場面を見聞きすること、さらに臨床工学技士などの多職種との協働についても重要視した実習を展開しているため、実習の主眼がやや異なっている。

## Ⅱ．研究目的

成人看護学実習の中で行っている、慢性期にある人々の看護を学ぶことを主眼とした透析センター実習における看護学生の学びを明らかにし、臨地実習での慢性期看護に関する教育のあり方の示唆を得ること。

## Ⅲ．研究方法

### １．用語の定義

・慢性期：疾患や症状が安定し、生命の危機がない病いの時期
・学び：学生が透析センターでの実習を通して、患者の看護や生活および多職種連携支援に対する気づきから感じ取り重要な知識として獲得したもの

### ２．分析対象

2008年度～2010年度にかけてＡ大学看護学科３年後期と４年生前期に成人看護学実習Ⅱ（慢性期）を履修し、単位修得した者のうち、同意が得られた156名（100％）の透析センター実習のレポートである。

### ３．調査方法および分析方法

研究デザインは、質的・記述的研究デザインである。Krippendolff の内容分析を参考に質的帰納的に分析を行う。

学生のレポートを全て記述データとして逐語録に書き起こし、全ての逐語録を分析対象にする。学生個別に逐語録を精読し、透析看護や患者の生活、看護師の役割や活動の理解、および多職種との協働に関する学びなどを含む陳述を意味の理解できる長さの短文に区切り、記述単位を導く。全学生の記述単位を意味内容の類似性により抽象化し、コード、サブカテゴリー、カテゴリーを導く。分類された記述単位の出現頻度と比率を算出する。さらに、カテゴリー間の関係性を図式化する。

分析結果の信頼性・妥当性の確保のために、１名の研究者が分析後、同一データを別の１名の研究者が、分析過程および分類名、図式化の適切性を確認した。さらに、分析過程に関わっておらず、大学における看護学生への教育・研究経験のある見識者１名にサブカテゴリーのカテゴリーへの分類を依頼し、分析の一致率を Krippendolff の $\alpha$ 係数の計算式（Krippendorff, 1989）に基づき算出した。一致率による信頼性の確保の基準は、70％以上とした。

### ４．倫理的配慮

研究者らの所属機関の倫理審査委員会における承認を受けた後、研究を開始した。学生へは、研究協力への同意が強制されないよう、成人看護学実習の成績結果を公表した後に、口頭で研究参加の自由意思とプライバシー厳守について説明の上、同じ内容を１か月間掲示し、非承諾の申し出なしを同意とみなし対象とした。

## Ⅳ．結果

### １．透析センター実習における慢性期にある人々の看護に関する看護学生の学び

透析センター実習のレポートは、データ源とした学生数は156名で、記述データは、76,469文字だった。個々の学生の記述データから188の記述単位が抽出され、これらは58の全体分析のコードに統合された。抽象化を繰

## 表１　透析センター実習における慢性期にある人々の看護に関する学生の学び

n=156

| コード(58) | サブカテゴリー(29) | カテゴリー(8) |
|---|---|---|
| ・初めての透析治療・看護と透析患者との印象的な出会い　他1つ | ・初めての透析現場での印象的なふれあい(5) | 1)透析の現場に感性を触発される (49，26.1%) |
| ・透析現場の見学と透析室看護師の話から多くのより深い学びを得る　他1つ | ・透析現場での多くの貴重な経験への感激(10) | |
| ・透析について漠然としか知らなかったことに気づく | ・透析の現場に触れ自分の無知や無力さに気づく(3) | |
| ・初めてシャント部の血管に触れ，強い血流を感じ，循環への負担の大きさと維持の大切さを体感　他1つ | ・シャントへじかに触れ，機能や管理の理解が深まる（7） | |
| ・日本の透析患者数の増加と背景および治療の場などの実態を知る　他3つ | ・透析の一般的な知識を確かにする(14) | |
| ・透析生活を受け入れるまでの患者の我慢・拘束・不安に思いをめぐらせる　他1つ | ・透析患者が絶望から生活を受け入れていく過酷さの実感(3) | 2)透析患者の制限と苦痛の過酷さの実感 (32，17.0%) |
| ・患者が透析のためにやりたいことができなくなる自由を失う苦悩を知る　他2つ | ・透析は嫌になるほどの制限と自由を奪う患者の苦痛の深刻さの実感(14) | |
| ・透析の開始時のシャントの穿刺は痛そうで見ていて辛くなる　など2つ | ・透析中の患者の苦痛や拘束感を切実に思い知る(9) | |
| ・透析に慣れても気分転換は難しいことを知り，希望に叶う透析中の時間を過ごしてほしいと願う | ・透析中の時間を気分転換し過ごしてほしいと願う(1) | |
| ・透析治療が必要にならないよう予防的働きかけの大切さの痛感 | ・透析治療が必要にならないよう予防する働きかけの大切さの痛感(1) | |
| ・透析患者自身の食事と感情を調整する取り組みを聞けた印象の深さと透析中心の患者の生活の実感 | ・患者に主体的な透析中心の生活への取り組みを聞く(1) | 3)透析患者の強靭さへの驚きと尊敬 (13，6.9%) |
| ・透析は負担でも生きていくためにやめられない | ・透析は患者が生きるための手段(1) | |
| ・病気を受け入れ，透析を生活の一部と捉え辛くないと受け止めている患者の強さへの驚きと尊敬　他2つ | ・透析を生活の一部と捉え辛くないと受け止めている患者の強さへの驚きと尊敬(9) | |
| ・医療チームが密に情報交換・連携できるよう看護師が調整し，患者と家族にとって最も良い支援体制を築く重要性　他2つ | ・多職種連携を取り持ち，透析患者と家族にとって最良の支援体制を築く重要性（11） | 4)透析患者と家族にとって最良の支援を築く多職種連携の重要性 (23，12.2%) |
| ・水分・塩分・蛋白質などの食事制限を栄養士と連携して教育支援する重要性 | ・多職種と連携した継続的な教育支援の重要性を知る(2) | |
| ・ベストな透析の提供のための，患者の体調に応じた速度や時間の調整と全身の観察と安全管理および多職種連携の重要性　他1つ | ・ベストな透析の提供のため，患者の体調に応じた速度や時間の調整と全身の観察と安全管理および多職種連携の大切さ(10) | |
| ・血液透析導入時の，通院継続可能かの情報収集，透析時間帯の決定，通い易く生活に合ったクリニックの紹介支援の重要性を知る　他2つ | ・透析導入時の，生活背景に最適な，透析時間帯と場の選択の支援の重要性を知る(7) | 5)透析導入時の調整とセルフケア支援の重大さ (15，8.0%) |
| ・一生続く透析導入時の患者への説明は人生の受け止めを左右する重要なポイント | ・透析導入時の教育支援は人生を左右する重大なかかわり(2) | |
| ・透析患者にとって，まずは病気の適切な理解が重要で，自己管理の大切さを理解し促すにも医療者の指導力が要ることを知る　他1つ | ・透析患者への病気の適切な知識と自己管理の大切さの理解を促す教育支援の重要性の実感(6) | |
| 透析では特に日頃の水分制限が重要　他1つ | ・水分・食事の制限におけるセルフケアの重要性の実感(3) | 6)透析患者と家族のQOLを高める継続支援の重要性 (13，6.9%) |
| 透析の導入から透析継続中の患者のストレスと，受け止める家族が抱える問題と同時に配慮が必要　他2つ | ・透析の導入から透析継続中の患者と取り巻く家族・社会の問題と受け入れを共に考慮し続ける必要を知る(8) | |
| ・血液透析患者にかかわる看護師をはじめとする専門職は，患者がしたいことを実行でき，生活の制限が最小で，過度のストレスなくQOLの維持，向上に繋がる個別性のある指導・支援が必要 | ・患者の個別性にあったQOLを高める看護の重要性を知る(1) | |
| ・どうしたら納得し継続する事が出来るのか，透析患者と一緒に考え，アドヒアランスが向上できるような説明とかかわりの大切さと難しさの実感　他2つ | ・透析患者の心に寄り添い，QOL向上のためにともに歩む支援の大切さ(7) | 7)透析患者の心に寄り添う熟練看護師の教育支援のわざを知る (27，14.4%) |
| ・患者の生活状態を充分に把握，理解し，長い療養生活の制約が，過負荷や燃え尽きにならないよう気配りある患者指導の重要さの実感　他1つ | ・制限・禁止ばかりではなく，できることを肯定的に伝え，燃え尽きないよう気配りある患者教育する重要さの実感(12) | |
| ・透析患者と医療者が協力して病状コントロールしていくには互いの信頼関係と安心を与え意欲を引き出す関わりが重要と実感する | ・信頼関係と安心の提供が患者の意欲につながると知る(2) | |
| ・患者教育は看護師の人柄が現れるので上手い下手があるだろうと思う　他1つ | ・透析患者への熟練看護師の教育支援のわざを知る(3) | |
| ・透析患者専門ツアーがあると聴き，透析生活の可能性を広げるような資源を知ると共に支援環境づくりができればと願う | ・透析患者の生活の可能性を広げる資源の普及を願う(3) | 8)透析患者のQOLを高める資源・医療の進歩を願う (16，8.5%) |
| ・透析患者のQOLをより改善するため，在宅透析を含む透析医療の進歩の必要性の実感　他1つ | ・透析患者のQOLをより改善するため，在宅透析を含む透析医療の進歩の必要性を実感する(7) | |
| ・在宅血液透析の普及の遅れと医療経済/患者の負担の大きいことを知る　他1つ | ・経済・管理の負担を一因とした在宅血液透析の普及の遅れを残念に思う(6) | |

＊表中の（　）の数字は記述単位数，%は全記述単位数188に占める比率を示す。

り返し、29サブカテゴリー、８カテゴリーにまとめられた。分析結果は表１に示す。

なお、記述単位数と比率は、あくまで質的分析結果の参考として示したものであり、数の多少が重要性を示唆するものではない。以下、【　】をカテゴリー、＜　＞をサブカテゴリーとし、８つのカテゴリーごとに説明する。

１）【透析の現場に感性を触発される】

看護学生は透析について講義を受けた後、実習に臨んでいる。しかし、透析の現場で初めて透析患者と接することは、学生にとっては、＜初めての透析現場での印象的なふれあい＞であった。透析センター実習は、講義での知識がリアルさをもって学生に肉薄し、＜透析の一般的な知識を確かにする＞ことに繋がっていた。これらは、【透析の現場に感性を触発される】にまとめられた。８カテゴリー中、最も多い49記述単位を含み、26.1％を占めた。

２）【透析患者の制限と苦痛の過酷さの実感】

看護学生は、患者との対話や看護師との事例に関する話から、＜透析は嫌になるほどの制限と自由を奪う患者の苦痛の深刻さの実感＞や、＜透析中の患者の苦痛や拘束感を切実に思い知る＞学びをしていた。これらは、【透析患者の制限と苦痛の過酷さの実感】と表された。８カテゴリー中、２番目に多い32記述単位を含み、17.0％を占めた。

３）【透析患者の強靭さへの驚きと尊敬】

透析患者と直接話す中では、＜透析は患者が生きるための手段＞であると気づき、＜透析を生活の一部と捉え辛くないと受け止めている患者の強さへの驚きと尊敬＞が感じられていた。これらは、【透析患者の強靭さへの驚きと尊敬】に統合された。

４）【透析患者と家族にとって最良の支援を築く多職種連携の重要性】

透析センターでの患者管理の見学からは、医師、臨床工学技士、看護師が適宜、密に情報交換している様子などから、＜多職種連携を取り持ち、透析患者と家族にとって最良の支援体制を築く重要性＞などに気づくことができた。これらは、【透析患者と家族にとって最良の支援を築く多職種連携の重要性】と示された。４番目に多く記述単位を含み、23記述単位、12.2％だった。

５）【透析導入時の調整とセルフケア支援の重大さ】

患者にとって透析導入は、人生にかかわる重大事と受け止められ、導入し継続していく上では、＜透析導入時の教育支援は人生を左右する重大なかかわり＞が導かれた。これらは、【透析導入時の調整とセルフケア支援の重大さ】にまとめられた。

６）【透析患者と家族の QOL を高める継続支援の重要性】

食事を管理する療養のセルフケア経験を患者に直接きくことや、看護師との対話で考えたことからは、＜水分・食事の制限におけるセルフケアの重要性の実感＞や、＜透析の導入から透析継続中の患者と取り巻く家族・社会の問題と受け入れを共に考慮し続ける必要性を知る＞が表された。これらからは、【透析患者と家族の QOL を高める継続支援の重要性】が表された。

７）【透析患者の心に寄り添う熟練看護師の教育支援のわざを知る】

透析患者にじかに触れ、苦痛や自己管理の大変さを知ると同時に看護の工夫の難しさを多くの学生が実感していた。そうした中で、看護師との実践事例に関する対話の中で、＜信頼関係と安心の提供が患者の意欲につながる＞ことなどを具体的に認識できていた。これらは、教科書にはない現場の看護師ならではの患者教育のこつを学べた経験であり、【透析患者の心に寄り添う熟練看護師の教育支援のわざを知る】にまとめられた。これは３番目に多い27記述単位を含み、14.4％を占めた。

８）【透析患者の QOL を高める資源・医療の進歩を願う】

透析患者専門の旅行ツアーの紹介や、在宅血液透析の利益と負担の実情などの看護師や臨床工学技士の話からは、＜透析患者の生活の可能性を広げる資源の普及を願う＞などの気づきが挙げられた。これらは、【透析患者の QOL を高める資源・医療の進歩を願う】としてまとめられた。

**２．透析センター実習における慢性期にある人々の看護に関する看護学生の学びの構造**

８つのカテゴリーの中心的意味から、関係性を検討した結果、図１が示された。

【透析の現場に感性を触発される】は、他の７つのカテゴリーすべてと互いに促しあう関係にある学びであり、コアカテゴリーとなっていた。７つのカテゴリーは、透析患者像、セルフケア支援、支援体制・システムの３つ

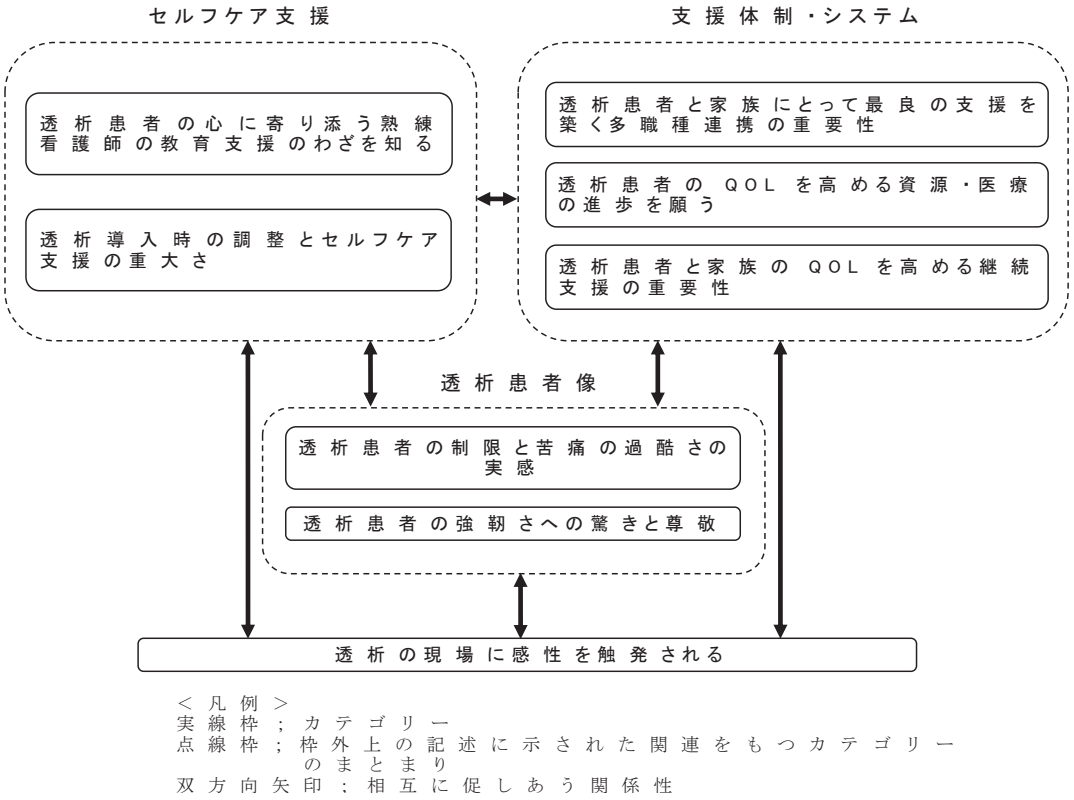



**図１　透析センター実習における慢性期にある人々の看護に関する看護学生の学びの構造**

に関する学びとして点線枠によりまとめられた。これらの３つの学びは、相互に促しあう学びとして関係づけられた。

### ３．分析の一致率

研究者１名と、本研究に携わっていない第３者１名との２者間のサブカテゴリーからカテゴリーへの分類の評定者間一致率は、Krippendolff の $\alpha$ 係数において91.3％であった。これは、本研究が明らかにした８カテゴリーが信頼性を確保していることを示している。

## Ⅴ．考察

透析センター実習における慢性期にある人々の看護に関する看護学生の学びは、透析治療や看護師、臨床工学技師、患者とじかに接し、【透析の現場に感性を触発される】学びを得、透析患者像、セルフケア支援および支援体制・システムの３つに分類される学びが明らかとなった。

本研究結果から、実習で現場に触れることで感性が刺激され、より深い学びが得られたと考える。菊池は、体験により抽象的イメージが具体的イメージになり、講義での「知る」レベルを超え「理解する」、「身につける」レベルまでの学習を可能にする（菊池、2004）と述べている。成人看護学実習における血液透析実習の学びを分析した研究（葛西、2006）では、透析患者の生活の理解、透析医療の実際、看護師の役割と支援の実際、透析を受けている患者像について実習体験から理解を深めたことが示唆されている。これらから、透析現場に触れることによって、より深い学びが得られたことが考えられる。

透析患者の手記を２年次前半の講義に取り入れ看護学生の学びを調査した研究からは、患者の闘病の苦痛・心理・ライフスタイルの変化、透析医療のすばらしさ、看護にもとめられるもの、が学びとして挙がっている（掛屋、2009）。本研究知見のカテゴリーの分類である、透析患者像やセルフケア支援の学びの内容とは類似点があるが、本研究では支援体制・システムの面についての学びが広く挙げられていた。これは、透析センター実習では、看護師だけでなく、医師や臨床工学技師が患者にかかわっていること、透析センター看護師との対話の中で透析導入から継続中の多職種および施設間の連携について話を聴く機会があることが、学びの内容に広がりをもたせた可能性が考えられた。本研究と同様の方法による透析室実習の学びに関する先行研究で、看護の役割を短期的に捉えるのではなく、「保健・医療・福祉の有機的な連携」として深い学びを得る機会となっていることを

示唆するもの（長澤、2004）があり、透析をめぐる多職種間・多施設間の連携支援は実習体験を通して身につく学びであると思われる。同じ知識を講義で提供されるのと、現場を目の前にして聞くのとでは、学びのレベルが違い、より深く学ぶことができるということが、ここでも関連していると思われる（Westphal, Lancaster, & Park, 2013）。本知見の学びの構造は、現場に感性を触発されることと、他のすべての学びとが促しあう関係を示しており、これまでに挙げたいくつかの先行研究から学びの構造の適切性が支持されていると考えられる（Michael, Candela, & Mitchell, 2002）。

本研究における透析に関する実習における学びの内容は、透析患者像、セルフケア支援および支援体制・システムの３つにわけられた。秋山ら（2008）は、患者の心理的特徴、安心して治療が受けられるような看護、家族に対する看護、透析治療の特徴の４カテゴリーを示唆している。宮堀ら（2007）は、透析療法における看護師の役割、対象（患者と家族）理解、チームアプローチの必要性など５カテゴリーを挙げた。佐名木ら（2007）は、その人らしい生活や人生を送ることの重要視、食事・水分などの自己管理、患者を支える社会システムや家族の重要性、透析治療に伴う苦痛、患者の生活に合わせたセルフケア能力向上への援助など７カテゴリーを示した。本研究も先行研究も、透析患者は不安や苦痛を抱えながら前向きさをもつこと、患者教育には工夫があること、多職種と連携して安全で効率よい治療の援助をすること、支援システムの重要性など学びの命名は異なるが、内容には共通性があると考えられた。

実習における慢性期看護の教育のあり方への示唆として、多様な看護を実現するために、臨地実習指導者である看護師と看護教員との連携が重要であることがいえる。（White, Cartwright, & Lottes, 2012）。

また、慢性期看護論の講義を現場で透析を管理している臨床工学技士などに引き続き担当してもらい、さらに実習においても連携していくことが有用と思われる。

## Ⅵ．結論

透析センター実習における多職種連携教育を通した看護学生の学びは、29サブカテゴリー、８カテゴリーにまとめられた。学びの構造は、【透析の現場に感性を触発される】が、透析患者像、セルフケア支援、支援体制・システムの３つに分類される他の７つのカテゴリーすべてと相互に促しあう学びとして関係づけられた。

本研究の結果から、多職種連携教育は、多職種の存在を知り、連携の重要性を深く理解する上で効果的であり、実習の場で意図的に連携の体験談や場面を見聞きする教育環境を調整することの重要性が示唆された。

本研究は、対象や施設に限りがあり一般化には限界がある。今後は、慢性期患者に継続的に治療を提供している場での臨地実習を、学生の教育に広く有効活用していくために、看護師と教育の教育における連携や、新たな教授方法や機会の開拓、学びの評価方法等について検討することが課題である。

## 謝辞

Ａ大学病院透析センターの看護師およびスタッフの皆様、そして調査にご協力いただいた学生の皆様に深く感謝いたします。

### 引用文献

秋山千恵子，久保かほる，鈴木妙他：看護学生の外来・検査・治療部門の見学実習での学び，埼玉医科大学短期大学紀要，19：23-31，2008

掛屋純子：患者の手記による看護学生の学び，新見公立短期大学紀要，29（2）：29-35，2009

葛西智賀子，岩月すみ江：成人看護学実習における＜選択実習＞の学び，弘前学院大学看護紀要，１：65-82，2006

菊池真由美：学生の実践力を高める授業の工夫，看護教育，１（13）：22-29，2004

宮堀真澄，永田美奈加，榊紘子：患者の語りから看護学生が捉えた慢性疾患を持つ人の看護―透析センター実習記録内容の分析から―，日本赤十字秋田短期大学紀要，12：37-45，2007

長澤利枝，馬場志乃，前野真由美：臨地実習における看護学生の「他職種との連携」に関する学習の実態（第２報），静岡県立大学短期大学部研究紀要，18：51-60，2004

奥村美奈子，古川直美，古田さゆり他：成熟期看護学実習における学生受け持ち患者特性からみた教育上の課題，岐阜県立看護大学紀要，７（2）：33-38，2007

佐名木宏美，武居明美，堀越政孝他：成人外来継続看護実習での人工腎臓センターにおける学生の学び，群馬県保健学紀要，28：31-39，2007

Michael, S. R., Candela, L., & Mitchell, S.（2002）. Aesthetic knowing: understanding the experience of chronic illness. *Nurse Educ, 27*（1）, 25-27.

Westphal, J., Lancaster, R., & Park, D.（2013）. Work-Arounds Observed by Fourth-Year Nursing Students. *West J Nurs Res.* doi: 10.1177/0193945913511707

White, D. L., Cartwright, J., & Lottes, J.（2012）. Long-term care nurse role models in clinical nursing education: the ECLEPs experience. *J Gerontol Nurs, 38*（1）, 43-51. doi: 10.3928/00989134-20110831-01

**Abstract**

Purpose: The purpose of this study is to identify the learning experiences of undergraduates about the nursing care for the adults with chronic illness through the clinical training at the hemodialysis center.

Methods: The records of third and fourth grades undergraduates which have been written about student's learning experiences at the hemodialysis center were analyzed by qualitative and inductive method.

Results: This study showed eight categories about the learning experiences of undergraduates during the clinical training, including "being inspired sensitivity at the clinical scene of hemodialysis center" and "significance of multidisciplinary support to build the best assistance for dialysis patients and their family members" etc.

Discussion: These findings suggest that chronic care nursing education at clinical setting promote depth understanding of the existence and the importance of multidisciplinary supports. It is necessary that further make an effort to coordinate the education environment that nursing student will be able to listen and watch nursing expert activities of many cooperation scene with many professions at the clinical settings.

Conclusions: These research findings were suggested that clinical practice in hemodialysis center can be the effective opportunities to be directly and deeply understood with chronic care nursing for the students.

**Key words:** adult nursing, clinical training, chronic care nursing, hemodialysis, nurse students